

第6回(2008.12.27 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「1月は初詣で」

私たちが子供の頃は正月が待ち遠しかったものである。小学校に上がる前はただ何となく嬉しかったのだが、学校に通うようになってからは正月というより冬休みが嬉しかった。還暦を過ぎた今は正月が来ることは決して嬉しくない。50歳を過ぎたところから一年が本当に短く感じてくる。それが歳を重ねるにともない加速されるからおそろしい。若い女性たちは20歳を過ぎたら肌がどうの、結婚がどうのとよく言うが、私(たち)のそれはもっと切実で、1日1日と墓場に近寄っている実感がひしひしとする。

その昔、京都紫野大徳寺の一休禅師は「元旦は冥土の旅の一里塚、めでたいな、めでたいな」と詠んだ。人間は無から無に帰るのだからあきらめて悟りの境地に入らなければいけないよ、と教えているのだという人もいる。しかし、もしかするとただ嫌がらせをして喜んでいただけの嫌みな坊さんだったのではないだろうか。

月の始まりは元日で終わりは晦日だから、1月1日は特に「元旦」と呼び、12月31日を「大晦日」と呼ぶのだが、元旦の旦の字は地平線に太陽が出ていることを表している。

古代から、人類は太陽に対して憧れと崇拜の念を持っていたことはたしかで、寒暖・明暗は農耕・牧畜など人間生活にこれほど影響を与えてくれているものはないからだが、古代メソポタミアのバベルの塔(ジグラット=空中神殿)の建設しかり、古代エジプトのファラオ(王)が死して太陽神ラーとなると信じていたこと、これまたしかりである。

わが国でも天照大御神(天照大神)は太陽神である。家庭の神棚に地元の氏神さまとともに天照大御神のお札が祀られるのは、やはり太陽信仰の現れである。だから元旦の初日の出を拝む風習があるのだろうが、あるテレビ局が初日の出を拝む場所はどこが良いかアンケートをとったら、「富士山頂が最も望ましい」という意見が圧倒的だったという。

たしかに富士山は美しい山で、日本人の誇りだが、世界遺産に指定されない理由の一つに、登山客の残したゴミが問題だと言われたことがあった。かなり以前に富士山から天然記念物の雷鳥が姿を消したという話を聞いた。原因は人間の捨てたゴミをあさって狐や小動物が増え、雷鳥の営巣が出来なくなったからだという。

正月は神社仏閣に初詣をする。最近では信仰心のかけらもない若者までもが物見遊山的に押し掛けるが、初詣とは神社仏閣に新年のご挨拶をして、その年の無事平安を祈る習わしであり、そもそもは大晦日から元旦にかけて氏神さまの社に籠もる「年籠もり」が始まりである。

自分の祖先の神、あるいは氏(うじ)や一族の信仰している神さまである「氏神さま」にお詣りするか、その年の干支によって福德を司る神さま(歳徳神)がおられる方角の神社にお詣りする「恵方参り」をするか、などが本来の初詣である。

神社では手水(ちょうず)舎で嗽、手水(手洗い)に身を清めてからお祈りをするのだが、お尻を拭いた汚い手で柏手を打って神さまを呼びだし、臭い息を吐きかけている罰当たりな者がいる。なかには手水場で柄杓に直接汚い口をつけてガラガラとやるとんでもない人もいる。感染症がうつたらどうしてくれる。また、夜遊び気分初詣をしたりデートに誘う口実にしたりする若者もいるが、初詣は厳粛な神事である。とんでもないことだ。

初詣で破魔矢(はまや)を買ってくる。そもそも破魔矢は破魔弓とセットで男子の初正月や初節句に飾るものである。古来より日本では天皇の病氣平癒祈願や入浴中あるいは皇子出産の際に、四方に向かって弓の弦を強く引き鳴らして邪気を払う「鳴弦の儀」が行われたが、破魔矢は古代中国の宮中で悪魔払いの行事として悪魔の目を象った的を弓で射たことが始まりだという説がある。この的を「ハマ」といったことから破魔弓、破魔矢と呼んだという説もある。

平安時代、宮中において天皇の就寝前にも「鳴弦の儀式」を行うようになったが、それは「滝口の武士」の役目だった。滝口の武士とは宇多天皇(第59代天皇、在位887~897)が弓を射る優れた者を選んで内裏の警護にあてたのが始まりで、御所の清涼殿の北側にある御溝水の落ちる滝口の近くに詰め所があったから滝口の武士と呼ばれた。

この滝口の武士は、時代によって若干違ってくるが、蔵人所に所属する10人から20人くらいで構成されていた。貴族の家人の中から弓射の試験に合格した優秀な源氏や平氏の強者が多く、宿直の際には鳴弦の後、天皇に直接名乗りを上げる習慣があつて、宮殿に巣くう狐狸鳥獣や風雨による物音が妖怪変化だと信じている迷信からの恐れや不安を、大きな声で力強くあげる名乗りや鳴弦の音で解消してくれる大きな役割を果たしていた。

滝口の武士で有名な者に斎藤時頼(さいとうのときより)がいる。時頼は平重盛(たいらのしげもり=平清盛の長男)に仕えていた武士で、重盛の推挙で滝口の武士となった。清盛が催した花見の宴で、建礼門院徳子(高倉天皇の中宮、重盛の妹)に仕えていた横笛という女の舞を見て一目惚れした。無骨な時頼がようやくの思いで恋文をしたためたのだが、父親から反対されてわずか19歳で出家したという。そのため時頼は「滝口入道」と呼ばれた。

一方、横笛は時頼の愛を受け入れ、自分の気持ちを滝口入道に知らせるべく探し歩いてようやく滝口入道のいる寺にたどり着くが、滝口入道は修行の妨げとなるといって会わない。そして、これ以上訪ねて来られてはいけないといって女人禁制の高野山静浄院へ移ったため、その娘は悲しみのあまり大堰川に身を投げたという悲しい物語がある。明治の文芸評論家の高山樗牛(たかやまぢょうぎゅう)が書いた作品「滝口入道」が有名である。平家物語では横笛は尼になったとされているが、斎藤時頼は修業をつみ「高野聖」となって大円院の住職となった。「時頼は卑怯だ。ましてや高野聖と称された高僧が衆生を救う身仏に使える身でありながら、人(女性)を不幸にしているのか！自分でまいた種であまりにも自分勝手ではないか！喝！」などと怒っても仕方がない。世の中なんてそんなものだ。

話を本題に戻そう。正月にはダルマ(達磨)を買ってきて飾る人も多い。古くから、ダルマを買ってきたらすぐに左目に墨を入れて一年の無事息災を祈願して、年末にはお礼の意味を込めて右目にも墨を入れて神社に納める習慣がある。なぜ最初に左目に入れるかといえば、宮中の玉座や神社仏閣は原則的に南向きだから、天皇や高貴な人などには日が昇るのを最初に見えるのが左目からである、という説によるらしい。

ダルマは菩提達磨大師(382~532)に由来しているが、達磨大師はインドの王子さまで、中国の禅宗の開祖と言われている人である。本来のボーディダルマという名前から、漢字で菩提達磨と書くようになった。

達磨大師は、少林寺で9年間も座禅していたために足が腐ってしまったという伝説からダルマには足がないが、日本のダルマの始まりは群馬県の高崎にある少林山達磨寺だという。この寺は高崎城主の願いで水戸光圀が中国から心越禅師を招いて開山したというが、9代東獄和尚がダルマを造って1月7日の「人日の節句」に売り出させた、というのが正月にダルマを飾る始まりである。

また、正月に限らず願い事があるときは達磨を買ってきて念願成就した時に右目に目を入れる風習がある。議員などに立候補して当選すると、選挙事務所で大きなダルマの目を入れてバンザイする様子をテレビで放映されることが多いのだが、もし落選したらあのダルマの運命はどうなるのだろうか。腹いせにボコボコにされはしないか、と私はいつも心配になるのだ。